

# 第2回公認心理師国家試験

## 分析速報

2019年8月6日 河合塾 KALS

2019年8月4日（日曜日）に、第2回公認心理師国家試験が行われた。本資料では、第2回公認心理師国家試験の出題形式・出題内容・問題の難易度等を、過去の公認心理師国家試験と比較しながら徹底分析する。

### 1. 出題形式の比較

- 試験時間・問題数・マークシート用紙は第1回を踏襲。以下の点は全て第1回と同じ。
  - ・午前の部（10時～12時）、午後の部（13時半～15時半）各120分の2部構成。
  - ・午前の部・午後の部ともに、問題数は77題。全154題。
  - ・マークシート用紙はAとBのいずれかが渡される。用紙Aは塗りつぶす①～⑤が横にならんでおり、用紙Bは①～⑤が縦にならんでいる。マークシートが用紙Aであっても用紙Bであっても試験問題に違いはない。
- 解答形式は本試験と同様、5肢択一（5つの選択肢から1つを選ぶ形式）、4肢択一（4つの選択肢から1つを選ぶ形式）、5肢択二（5つの選択肢から2つを選ぶ形式）の3種類。ただし以下の表1の通り、第1回試験と第2回試験で出題数は異なる。
- 表1から、今年度は4肢択一が大幅に減少していることが分かる。ただし、5肢択一と4肢択一は難易度に大きな違いがない（むしろ4肢択一の方が解きにくい場合もある）ため、試験全体の難易度に与えた影響は少ないと思われる。

表1 解答形式比較

	第1回本試	第1回追試	第2回試験
5肢択一	105題	103題	116題
4肢択一	26題	23題	14題
5肢択二	23題	28題	24題

- 不適切な内容を選ぶ問題が、特定の番号帯に固めて配置されていた点も第1回試験と同様。例えば、第2回試験の午前問題の35番～43番は、すべて不適切な内容の選択肢を選ぶ問題である。さらに「不適切なものを選びなさい」と問題文に下線が引いてある点も第1回試験と同様。問題数は以下の表2の通り。なお今年度は、不適切な内容の選択肢を選ぶ問題が第1回試験よりも増加したが、こちらも難易度への影響は少ないと思われる。

表2 選択内容比較

	第1回本試	第1回追試	第2回試験
適切選択	127 題	133 題	123 題
不適切選択	27 題	21 題	31 題

※適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。  
 ※不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

- 午前・午後ともに一般問題 58 題のあとに 19 題の事例問題という構成も第1回試験と同様。つまり、一般問題は午前と午後合わせて  $58 \times 2 = 116$  題、事例問題は午前と午後合わせて  $19 \times 2 = 38$  題となる。1つ1つの事例の文章の長さも本試験と同様で、5行～10行程度。

表3 一般問題・事例問題比較

	第1回本試	第1回追試	第2回試験
一般問題	116 題	116 題	116 題
事例問題	38 題	38 題	38 題

- 一般問題と事例問題の問題数が第1回試験と同一であったことから、今年度も第1回試験と同様に一般問題1点・事例問題3点という配点で、表4の通り 230 点満点と予想される。

表4 第1回試験の配点

	配点	問題数	総得点
一般問題	1 点	116 題	116 点
事例問題	3 点	38 題	114 点
合計	—	154 題	230 点

- 合格ラインについても、第1回試験と同様 60% (138 点) と予想される。第1回追試は、第1回本試よりも問題の難易度が高かったが、合格ラインは第1回本試と同様 60%に設定された。このことから第2回試験も、問題の難易度差による合格ラインの変動は考えにくい。

## 2. ブループリントとの対応（1）

第2回試験の全ての問題について、どの大項目に相当するか判定し、まとめたものが以下の表5である（各問題の判定は、巻末資料を参照）。

表5 ブループリント大項目の分類比較

	内容	出題数	公表出題数	比較
①	公認心理師としての職責の自覚	12題	13.9題 (9%)	▼ 1.9
②	問題解決能力と生涯学習			
③	多職種連携・地域連携			
④	心理学・臨床心理学の全体像	3題	4.6題 (3%)	▼ 1.6
⑤	心理学における研究	4題	3.1題 (2%)	△ 0.9
⑥	心理学に関する実験	2題	3.1題 (2%)	▼ 1.1
⑦	知覚及び認知	3題	3.1題 (2%)	▼ 0.1
⑧	学習及び言語	4題	3.1題 (2%)	△ 0.9
⑨	感情及び人格	4題	3.1題 (2%)	△ 0.9
⑩	脳・神経の働き	2題	3.1題 (2%)	▼ 1.1
⑪	社会及び集団に関する心理学	3題	3.1題 (2%)	▼ 0.1
⑫	発達	8題	7.7題 (5%)	△ 0.3
⑬	障害者（児）の心理学	3題	4.6題 (3%)	▼ 1.6
⑭	心理状態の観察及び結果の分析	15題	12.3題 (8%)	△ 2.7
⑮	心理に関する支援	7題	9.2題 (6%)	▼ 2.2
⑯	健康・医療に関する心理学	14題	13.9題 (9%)	△ 0.1
⑰	福祉に関する心理学	13題	13.9題 (9%)	▼ 0.9
⑱	教育に関する心理学	14題	13.9題 (9%)	△ 0.1
⑲	司法・犯罪に関する心理学	5題	7.7題 (5%)	▼ 2.7
⑳	産業・組織に関する心理学	9題	7.7題 (5%)	△ 1.3
㉑	人体の構造と機能及び疾病	5題	6.2題 (4%)	▼ 1.2
㉒	精神疾患とその治療	9題	7.7題 (5%)	△ 1.3
㉓	公認心理師に関する制度	11題	9.2題 (6%)	△ 1.8
㉔	その他	4題	3.1題 (2%)	△ 0.9

なお、各問題がどの大項目に相当するかの判定については、河合塾 KALS 独自の判定であり、心理研修センターより発表されたものではない。複数の領域にまたがる問題は、ブループリントに記載のキーワードが問題文や選択肢文中にあるか否かを判定基準とした。

公表されている出題数と実際の出題数のズレは「各問題がどの大項目に該当するか」という判断に伴う誤差の範囲と考えられる。基本的に公認心理師国家試験は、ブループリントの出題割合に近い形で出題されていると思って良いだろう。

注目点は、大項目⑭「心理状態の観察及び結果の分析」の出題数が多いことである。第2回試験全体として、心理検査に関する問題が特に多かった。例えば、選択肢に心理検査名が列挙され、問題文の内容から適切な心理検査を選択する問題だけでも、問 23, 問 36, 問 60, 問 61, 問 69, 問 88, 問 139 と 7 問 (!) もある。他にも、HDS-R の具体的な得点から認知症が疑われるか否かを判断する必要がある問 64 や問 139 のように、心理検査のカットオフ値 (何点を境目に困難を持っているとみなすか) に関する理解を要する問題も多数出題されている。この傾向は、昨年行われた第1回追試から続いており、今後も心理検査に対する幅広い理解は必須であると思われる。

### 3. ブループリントとの対応（2）

平成 31 年 3 月 20 日に、平成 31 年度版ブループリントが発表され、平成 30 年度版ブループリントに対して、約 50 のキーワードが追加された。これら追加された新キーワードは、第 2 回試験にどの程度出題されていたのだろうか。

表 6 新キーワードが関連すると予想される問題

番号	問題内容	大項目番号・新キーワード	
問 10	感情に関するモデル・説	⑨	感情と情報処理
問 13	多くの人による行動の影響	⑪	対人行動，対人的相互作用
問 25	R. Rosenthal の実験	⑱	教師—生徒関係
問 27	形成的評価	⑱	教育評価
問 29	事故発生モデル	⑳	労働災害
問 34	学校における自殺予防教育	㉔	自殺の予防（心理教育）
問 76	58 歳女性・他職種連携による支援	㉒	アドヒアランス
問 79	基本感情・怒り	⑨	感情の機能
問 83	視床下部—下垂体系の解剖と生理	㉑	解剖学・生理学
問 98	非行の要因に関する社会的絆理論	⑲	非行・犯罪の理論
問 113	更生保護の業務及び制度	⑲	施設内処遇と社会内処遇
問 127	対人魅力	⑪	親密な人間関係
問 145	中 1 数学教科担任事例・プログラム学習	⑱	プログラム学習
問 146	14 歳男子事例・教育評価	⑱	教育評価
問 153	85 歳男性事例・地域包括支援センター	⑮	地域包括ケアシステム

新キーワードが関連すると予想される問題は全部で 15 題で、これは全問題数の約 9.7% に相当する。もちろん、新規追加されたキーワードの全てが出題されたわけではないが、出題者の立場に立てば、問題として出題したい内容をブループリントに追加したものと思われる。実際、問 27 や問 145 のように、新キーワードがかなり直接的に出題された問題もある。よって、ブループリントに新規追加されたキーワードは出題される可能性が高く、優先的にチェックする必要があるだろう。

だが上記の 15 題の中には、新キーワードを充分に対策して試験に臨んだからといって、解けるとは限らない問題も含まれている（問 29，問 83 など）。また、全問題の 9.7% に過ぎないという事実もある。よって新キーワードは、確かに優先的に対策すべきだが「それさえやっておけばよい」ものではないことは、重々承知しておくべきだろう。

## 4. 問題の難易度（1）

問題の難易度を以下の3段階で判定した。なお、この判定基準および、各設問の難易度の判定は河合塾 KALS 独自のものであり、日本心理研修センターが発表したものではない。

- ◇ 難易度 A…正解することは難しいと思われる問題。
- ◇ 難易度 B…解答に自信を持ちにくいと思われる問題。
- ◇ 難易度 C…比較的答えやすいと思われる問題。

以上の基準で第2回試験全154題の判定を行った。その集計結果が以下の表7である（各問題の判定については本資料の巻末参照）。

表7 問題の難易度（第2回試験）

難易度	午前問題		午後問題		第2回全体	
A	9題	11.7%	16題	20.8%	25題	16.2%
B	35題	45.5%	32題	41.6%	67題	43.5%
C	33題	42.9%	29題	37.7%	62題	40.3%

特に第2回試験で注目すべきは、午後問題の難易度の高さである。実際、試験が終わった後に多くの受験生から「特に午後が難しかった」という声が多く寄せられた。ただ、改めて表7を見ると、確かに午後問題の難易度 A は多いものの、思った以上に午前問題と変わらないのではないかと…？という印象を抱くかもしれない。

ここで注目すべきは問題の構成である。午後問題は、序盤に難易度 A の問題が連続して出題されていた。具体的には、午後問題が問78から始まり、問81・問83・問84・問85・問87と難易度 A の解答困難な問題が続く。その後も問98・問99・問100と難易度 A が続く場所がある。すると、いわゆる印象形成における初頭効果のように、全体の問題の印象が実際以上に高難易度と認知された可能性が高い。すでに午前に2時間の問題を終えた疲労感から、集中力の持続が難しくなっていることも、冷静な判断の困難さに拍車をかけている。

ただ、午後問題を概観すれば、明らかに得点しやすい難易度 C 問題や、選択肢を2つにまで絞り込むことができる（が、そこから1つに決めることが難しい）難易度 B 問題も、多く出題されている。合否はこの難易度 C と難易度 B で、どれだけ得点できたかで決まる。難易度 A 問題のラッシュに混乱することなく、冷静に気持ちを切り替えて難易度 C 問題を確実に得点し、難易度 B 問題の選択肢内容を冷静に検討できたかが、合否を分けたと言えよう。

## 5. 問題の難易度（2）

次に、問題の難易度を第1回本試・第1回追試と比較した。それが以下の表8である。

表8 問題の難易度比較

難易度	第1回本試		第1回追試		第2回試験	
	問題数	割合	問題数	割合	問題数	割合
A	9題	5.8%	29題	18.8%	25題	16.2%
B	81題	52.6%	61題	39.6%	67題	43.5%
C	64題	41.6%	64題	41.6%	62題	40.3%

表8を概観すると、第2回試験は第1回本試より難易度が高く、第1回追試とほぼ同程度の難易度であったと考えられる。ただ前述したように、午後問題序盤に固められた難易度A問題の存在により、第1回追試より第2回試験の方がさらに難しいという印象を抱きやすいかもしれない。

次に、以下の設定で行った得点シミュレーションを紹介する。

- ・第2回試験の配点を、第1回試験と同様、一般問題1点・事例問題3点と想定。
- ・難易度A問題は、正解率20%（多くが五肢択一のため、正解率5分の1と想定）
- ・難易度B問題は、正解率50%（選択肢を2つまで絞り込めたと想定）
- ・難易度C問題は、正解率80%（知識があれば確実に正解できると想定）とする。

表9 得点シミュレーション

種別	難易度	第1回本試		第1回追試		第2回試験	
		問題数	予想得点	問題数	予想得点	問題数	予想得点
一般問題 (1点)	A (×0.2)	8題	1.6点	27題	5.4点	25題	5.0点
	B (×0.5)	60題	30.0点	46題	23.0点	50題	25.0点
	C (×0.8)	48題	38.4点	43題	34.4点	41題	32.8点
事例問題 (3点)	A (×0.2)	1題	0.6点	2題	1.2点	0題	0.0点
	B (×0.5)	21題	31.5点	15題	22.5点	17題	25.5点
	C (×0.8)	16題	38.4点	21題	50.4点	21題	50.4点
予想得点		140.5点		136.9点		138.7点	

表9によれば、第2回試験において難易度C問題を確実に得点し、難易度B問題を二択まで絞り込めれば、難易度A問題が完全に運任せでも138.7点となる。第1回試験と同様に合格ラインが138点(60%)であるならば、ギリギリではあるが、合格ラインに乗ることができる。難易度B問題で二択に絞り込んだ後、さらに冷静に内容を吟味することで正

解率を上げることができれば、より安定して合格ラインに乗ることができるだろう。よって、やはり難易度 A 問題ではなく、難易度 B 問題・難易度 C 問題でいかに得点を稼ぐことができるかが、合格の決め手になる。

## 6. 総評

公認心理師試験も第 1 回追試を含めれば 3 回目となり、試験形式・内容と共に安定してきた印象を受ける。午前・午後 77 問ずつ、事例問題は午前・午後共に最後にまとめて出題されるといった出題形式はほぼ定まり、今後も同様の形式で出題がなされるであろう。

また、他職種との連携を問う問題、医療・福祉・教育・司法・産業の 5 領域それぞれに関する問題、国の制度の元で働くための法や制度に関する理解を問う問題など、過去 3 回の試験問題から「公認心理師に求められているもの」が明確になってきた。本資料の表 5 からも分かる通り、ブループリントで公表されている割合とほぼ同じ割合で公認心理師試験は出題されている。このことから、まさにブループリントの内容こそが「公認心理師に求められているもの」と言えよう。つまり、心理学はもちろんのこと、他職種の連携や 5 領域に関する様々な知識、関係する法制度など、今後も公認心理師試験では、ブループリントに沿った幅広い知識や理解が求められるであろう。

なお、事例問題が 3 点と思われることに注目し「一般問題を捨て、事例問題で稼ぐ」という発想は、危険だ。事例問題だけで一般問題を補いきれないことが、表 9 から分かる。また、事例問題の中には適切な心理検査の名前を選ぶ問題（問 69）など、知識がないと解けない事例問題も多く存在する。そのため、特定分野や内容に偏った学習は避け、ブループリントを軸に一般問題について幅広く対策し、一般問題の対策で得た知識をベースに事例問題に対応する、という取り組みが基本姿勢となる。

また今年度の特徴として、6 ページで紹介した午後問題の構成がある。高難易度問題が序盤に並んだことにより、決して難易度が高いとは言えない問題まで、冷静さを失い、適切に判断できなかつた可能性がある。そしてこの傾向は、今年度だけのものとは限らない。そこで、今後の受験生に向けて、以下の 2 点をアドバイスとして贈る。

- ① 「難問で差がつくのではなく、難問の後で差がつく」という意識を持つこと。
- ② 体力・集中力が落ち、冷静な判断が難しくなる午後試験に備え、昼休憩はしっかり体を休めること。具体的には、昼休憩で午前問題の答え合わせなどは行わず、軽く昼食を済ませたあと、可能であれば仮眠を取ることが望ましい。

河合塾 KALS では第 2 回試験の内容を踏まえつつ、2020 年の公認心理師国家試験の対策講座を開講予定である。今後受験する予定の方も、ぜひご期待頂きたい。

2019 年 8 月 6 日 河合塾 KALS



## 7. 巻末資料 公認心理師国家試験 (2019年実施試験) 各設問分析

BP…ブループリント大項目の番号。

難度…問題の難易度がどの程度であったか。

- 難度A…正解することは難しいと思われる問題。
- 難度B…解答に自信を持ちにくいと思われる問題。
- 難度C…比較的答えやすいと思われる問題。

解答形式…マークシートを塗りつぶす内容はどうか。

- 5肢択一 …5つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 4肢択一 …4つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 5肢択二 …5つの選択肢から2つを選ぶ形式。

選択内容…どのような内容を正解として答えるか。

- 適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
- 不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
1	①	公認心理師の業務や資格	C	5肢択一	適切選択
2	③	ケア会議におけるスタッフへの対応	C	5肢択一	適切選択
3	④	心理学の3大潮流	C	5肢択一	適切選択
4	④	検査法を開発した人物	C	5肢択一	適切選択
5	⑤	操作する変数以外に影響する変数	B	5肢択一	適切選択
6	⑤	順序尺度によるデータの散布度	B	5肢択一	適切選択
7	⑤	量的変数で質的変数を予測する分析	A	5肢択一	適切選択
8	⑦	プライミング	B	5肢択一	適切選択
9	⑧	条件づけ理論の用語	C	5肢択一	適切選択
10	⑨	感情に関するモデル・説	A	5肢択一	適切選択
11	⑨	パーソナリティ障害	C	5肢択一	適切選択
12	⑩	神経細胞の生理	A	5肢択一	適切選択
13	⑪	多くの人による行動の影響	C	5肢択一	適切選択
14	⑫	乳幼児の社会的参照	B	5肢択一	適切選択
15	⑫	ASDの中枢性統合の弱さ	B	5肢択一	適切選択
16	⑭	神経心理学的テストバッテリー	A	5肢択一	適切選択
17	⑭	治療者自身のクライアントへの影響	C	5肢択一	適切選択
18	⑮	E. T. Gendlineの理論	C	5肢択一	適切選択
19	⑯	ライフサイクルと心の健康の関わり	B	5肢択一	適切選択
20	⑰	児童虐待の死亡事例の近年の傾向	B	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
21	⑰	マルトリートメント	B	5肢択一	適切選択
22	⑰	心的外傷後ストレス障害	C	5肢択一	適切選択
23	⑭	日本語を母語としない成人の知能検査	B	5肢択一	適切選択
24	⑱	暴力行為にあてはまる行為	A	5肢択一	適切選択
25	⑱	R. Rosenthal の実験	C	5肢択一	適切選択
26	⑱	いじめの重大事態への対応	B	5肢択一	適切選択
27	⑱	形成的評価	B	5肢択一	適切選択
28	⑲	反社会性パーソナリティ障害の診断基準	B	5肢択一	適切選択
29	⑳	事故発生モデル	A	5肢択一	適切選択
30	㉑	緊張病に特徴的な症状	A	5肢択一	適切選択
31	㉒	オピオイドの副作用	A	5肢択一	適切選択
32	㉓	我が国の保健医療の制度	C	5肢択一	適切選択
33	㉓	ストレスチェック制度	B	5肢択一	適切選択
34	㉔	学校における自殺予防教育	B	5肢択一	適切選択
35	①	公認心理師法	C	5肢択一	不適切選択
36	③	Alzheimer 患者に対する公認心理師の対応	B	5肢択一	不適切選択
37	⑦	記憶モニタリングの下位過程	B	5肢択一	不適切選択
38	⑭	半構造化面接	C	5肢択一	不適切選択
39	⑱	保護者への情報提供に関する対応	C	5肢択一	不適切選択
40	㉑	育児又は家族介護を行う労働者の福祉	B	5肢択一	不適切選択
41	㉑	右中大脳動脈領域の脳梗塞と障害	B	5肢択一	不適切選択
42	㉓	児童相談所の業務内容	B	5肢択一	不適切選択
43	㉓	教育基本法第2条における教育の目標	B	5肢択一	不適切選択
44	⑱	スクールカウンセラーに求められる役割	C	4肢択一	適切選択
45	⑯	SOAP 形式の診療録の記載内容	B	4肢択一	適切選択
46	⑬	就労継続支援 B 型	B	4肢択一	適切選択
47	⑯	アレキシアサイミア傾向の心身症患者	B	4肢択一	適切選択
48	⑮	心理面接における沈黙	C	4肢択一	不適切選択
49	③	多職種チームにおける公認心理師の留意点	C	4肢択一	不適切選択
50	①	公認心理師法	C	5肢択二	適切選択
51	⑮	緩和ケアと家族の関わり	C	5肢択二	適切選択
52	㉓	障害者差別解消法	C	5肢択二	適切選択
53	⑯	生活習慣病やその対応	B	5肢択二	適切選択
54	⑯	二次的外傷性ストレス	B	5肢択二	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
55	⑱	虞犯	B	5肢択二	適切選択
56	㉑	女性の更年期障害	A	5肢択二	適切選択
57	㉒	うつ病にみられることが多い症状	B	5肢択二	適切選択
58	㉔	公認心理師を要請するための実習	C	5肢択二	適切選択
59	⑰	2歳女兒・想定される心理的反応	B	5肢択一	適切選択
60	⑭	21歳女性・心理検査の選択	B	5肢択一	適切選択
61	⑭	2歳2ヶ月男児・心理検査の選択	C	5肢択一	適切選択
62	⑯	31歳女性・公認心理師の初期対応	C	5肢択一	適切選択
63	⑭	32歳女性・インテーク面接	C	5肢択一	適切選択
64	⑯	75歳男性・最も適切な助言	B	5肢択一	適切選択
65	⑯	26歳男性・両親への対応	B	5肢択一	適切選択
66	⑮	4歳女兒・公認心理師の助言	C	5肢択一	適切選択
67	⑰	5歳男児・公認心理師の初期対応	C	5肢択一	適切選択
68	⑱	9歳男児・担任教師に行う助言	C	5肢択一	適切選択
69	⑭	17歳男子・心理検査の選択	B	5肢択一	適切選択
70	㉒	28歳男性・考えられる病態	B	5肢択一	適切選択
71	⑫	79歳男性・心理状態の説明	C	5肢択一	不適切選択
72	⑰	14歳女子・児童相談所の対応	C	5肢択一	不適切選択
73	⑱	8歳男児・理解のための初期対応	C	5肢択一	不適切選択
74	㉒	35歳男性・公認心理師の対応	C	5肢択一	不適切選択
75	⑱	23歳男性・現在の状態の説明	C	4肢択一	適切選択
76	⑯	58歳女性・他職種連携による支援	B	5肢択二	適切選択
77	⑭	12歳女兒・行動の説明	B	5肢択二	適切選択
78	④	生物心理社会モデル	C	5肢択一	適切選択
79	⑨	基本感情・怒り	B	5肢択一	適切選択
80	⑤	1要因分散分析の帰無仮説	B	5肢択一	適切選択
81	⑦	運動視に関連した現象	A	5肢択一	適切選択
82	⑧	うつ状態に関連する現象	C	5肢択一	適切選択
83	㉑	視床下部一下垂体系の解剖と生理	A	5肢択一	適切選択
84	⑩	脳損傷後の記憶障害へのリハビリ手法	A	5肢択一	適切選択
85	⑪	役割取得の発達段階	A	5肢択一	適切選択
86	⑧	ディスレクシア	C	5肢択一	適切選択
87	⑭	知能検査における Flynn 効果	A	5肢択一	適切選択
88	⑭	1歳半幼児の認知・言語機能の心理検査	C	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
89	⑰	認知症高齢者への回想法	B	5肢択一	適切選択
90	⑰	デイケアでの利用者ミーティングの運営	B	5肢択一	適切選択
91	⑫	自閉スペクトラム症	B	5肢択一	適切選択
92	㉓	解離性障害	B	5肢択一	適切選択
93	⑫	ADHD の二次障害	C	5肢択一	適切選択
94	⑱	適性処遇交互作用	C	5肢択一	適切選択
95	①	自殺予防に対する公認心理師の対応・判断	C	5肢択一	適切選択
96	⑱	学校における生徒指導	B	5肢択一	適切選択
97	⑬	大学における合理的配慮	B	5肢択一	適切選択
98	⑲	非行の要因に関する社会的絆理論	A	5肢択一	適切選択
99	㉓	仕事に対する自分自身の認識パターン	A	5肢択一	適切選択
100	㉓	ナルコレプシー	A	5肢択一	適切選択
101	㉓	妊娠・出産とうつ病との関連	B	5肢択一	適切選択
102	㉓	医療機関との連携が必要な事例	B	5肢択一	適切選択
103	㉓	成年後見制度	A	5肢択一	適切選択
104	㉓	労働者の心の健康の保持増進のための指針	B	5肢択一	適切選択
105	㉔	交通事故後の学級会での情報提供	C	5肢択一	適切選択
106	㉔	自殺リスクが最も低い因子	C	5肢択一	適切選択
107	①	公認心理師法第2条	C	5肢択一	不適切選択
108	⑧	共同注意行動の例	B	5肢択一	不適切選択
109	⑨	ニューヨーク横断研究と9つの気質	A	5肢択一	不適切選択
110	⑫	J. Belsky のモデルと親の養育行動	B	5肢択一	不適切選択
111	⑮	I. D. Yalom の集団療法	A	5肢択一	不適切選択
112	⑮	心理療法の有効性の研究	B	5肢択一	不適切選択
113	⑲	更生保護の業務及び制度	B	5肢択一	不適切選択
114	㉓	採用面接と面接者のミス	C	5肢択一	不適切選択
115	㉑	糖尿病	C	5肢択一	不適切選択
116	㉓	ベンゾジアゼピン受容体作動薬の副作用	B	5肢択一	不適切選択
117	㉓	生活困窮者自立支援制度	A	5肢択一	不適切選択
118	㉓	児童生徒に対する出席停止措置	A	5肢択一	不適切選択
119	⑯	ストレス反応	B	5肢択一	不適切選択
120	①	心理支援を続行できない時	C	4肢択一	適切選択
121	②	スーパービジョン	B	4肢択一	適切選択
122	⑥	準実験的研究法	B	4肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
123	⑭	知能検査を含む集団式の知能テスト	B	4肢択一	適切選択
124	⑯	ギャンブル等依存症	C	4肢択一	適切選択
125	③	医師からのアセスメントの依頼	C	4肢択一	不適切選択
126	①	情報提供が秘密保持よりも優先される状況	C	5肢択二	適切選択
127	⑪	対人魅力	C	5肢択二	適切選択
128	⑫	J. Piaget の発達段階説	B	5肢択二	適切選択
129	⑬	PECS の説明	A	5肢択二	適切選択
130	⑭	田中ビネー知能検査 V の実施と解釈	B	5肢択二	適切選択
131	⑯	二次予防の取組	C	5肢択二	適切選択
132	⑰	知的障害のある子どもへの対応方針	C	5肢択二	適切選択
133	㉒	物質使用障害	A	5肢択二	適切選択
134	㉓	親権	B	5肢択二	適切選択
135	㉔	犯罪被害者等基本法	A	5肢択二	適切選択
136	⑥	実験計画と統計的手法の選択	C	5肢択一	適切選択
137	⑫	18歳女性・心理的特徴	C	5肢択一	適切選択
138	⑯	25歳男性・最も優先度の高い対応	C	5肢択一	適切選択
139	⑭	74歳女性・心理検査の選択	C	5肢択一	適切選択
140	⑭	22歳女性・公認心理師の対応	C	5肢択一	適切選択
141	⑮	19歳男性・社会構成主義からのアプローチ	B	5肢択一	適切選択
142	⑯	47歳男性・行動変容の段階を考慮した対応	B	5肢択一	適切選択
143	⑰	13歳男子・両親の行為と虐待種別	C	5肢択一	適切選択
144	⑰	9歳男児・行動の解釈	C	5肢択一	適切選択
145	⑱	中1数学教科担任・プログラム学習	C	5肢択一	適切選択
146	⑱	14歳男子・教育評価	B	5肢択一	適切選択
147	⑲	75歳女性・高齢者虐待のおそれ	B	5肢択一	適切選択
148	⑳	30歳女性・最も優先度の低いもの	B	5肢択一	適切選択
149	⑱	14歳女子・スクールカウンセラーの対応	C	5肢択一	不適切選択
150	⑰	25歳女性・状況から考えられること	B	5肢択一	不適切選択
151	㉑	50歳男性・最も優先される対応	B	4肢択一	適切選択
152	㉑	58歳男性・不眠に対する対応	B	5肢択二	適切選択
153	⑰	85歳男性・地域包括支援センターの対応	C	5肢択二	適切選択
154	㉑	35歳男性・公認心理師の対応	B	5肢択二	適切選択

※表中の難易度や分類などは、河合塾 KALS の独自の判断によるものです。個々の理解や価値観により、難易度や分類は異なります。あくまで参考に留めて頂きたいと思ひます。